

戦姫絶唱シンフォギア  
XDU —孤独な影と運命  
に捧ぐ鎮魂歌—

ヒモトラマンロープ・ダーク

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『弾ける光と正義の賛歌』から後のこと… 見事、ウルトラマンたちとイフロ星人を悪意の魔の手から救い出したマリヤたち。しかし、並行世界にて謎のウルトラマンスーツを駆るダークロプスゼロⅡメビウスキラールにより、攻撃を受けてしまう。そこへ、『美剣サキ』と名乗る少女が現れ…!?

一方、S・O・N・G・も黒いウルトラマンⅡベリアル率いる『新世代へニュージェネレーション』ウルトラマン』が強襲。壊滅的な打撃を受け、装者たちは囚われの身に。絶体絶命の危機…絶望の中、時空を飛び越え新たなウルトラマンが来訪する。その名は

…『ZERO』!!

再び交錯する戦乙女と光の戦士…やがて、大いなる陰謀が明らかとなる。さあ、捧げよ…運命に鎮魂歌を。

※試作版に続いて正式にスタートです。まだ読んでいない方はプロログにあたる試作版を先に読むことをオススメします。( <https://syosetu.org>

/?mode||write|novel|submit|view&amp;nid||  
230335)

※ULTRAMANイベント後のパラレル。

※ザル設定注意

※ULTRAMAN側、小説の設定一部アリ。

# 目次

S. O. N. G. 強襲	—	1
新たなウルトラマン	—	17
ULTRAMAN / ZERO	—	34
ALERT / 何かが叫ぶ声	—	49
NIGHT MARE / 不協和音	—	61
歪んだ歌と来たぞわれらの…	—	75
シンフォギア対ウルトラマン	—	94

# S. O. N. G. 強襲

まだ明け方の…仄暗く、朝日がまだ顔を出さない空。

その下でコンテナが積まれた山が並ぶ港が静寂に包まれている……

——ドオオン！

つい、数秒前までは。

刀を握り締め駆ける少女とそれを浮遊するように空中を飛翔する人影がふたつが追う。少女の走りは猫のように軽やかで生身の人間が出せるそれを超え、そんなスピードでコンテナの合間を縫って駆け抜けようと追跡者を振り切ることに先刻から叶わずにいた……

「ええい、しつこい！ 息ひとつくれる暇すら与えてくれないとはな！」

少女、風鳴翼は悪態をつく。既にシンフォギアを展開しているが、天ノ羽斬は既に随所が欠けてボロボロ…。刃も溢れ、もう鈍らの棒切れ寸前まで傷んでいる。

強敵…今まで様々な輩を相手をしてきたが、ここまで厄介なのはいつ以来か。仲間とは分断され、ズルズルと距離を離された上に相手はまだ無傷も同然。通常のシンフォギアの攻撃がうまく通らないことから察するに敵は『並行世界の存在』。そういえば、並行世界を渡った後輩が言っていた…

「これが… ウルトランマンか！」

少しでも間合いを開けようとコンテナを蹴りとはず…が、巨大な爪の羅列が交錯し簡単に引き裂いて細切れに。そこから飛び出してきたのは重厚な鎧を着込むパワードスーツのようなウルトラマン。胸部に『X』とカラータイマーを輝かせるその名は『ULTRAMAN SUIT X(エックス)』…両腕のガンドレッドからは機械的ながらも異形の爪が並ぶ。

「…ちっ！」

足留めが出来ないなら……！ 翼はあえて逆走し、逆立ちするとアームドギアの刃を脚に装着して回転、必殺の技『逆・羅烈』による奇襲をかける。不意打ちにXは咄嗟にガンドレッドでガード：刃が装甲に当たり甲高い音をたてるが、亀裂が走りメリメリと悲鳴をあげたのは天ノ羽斬：

さらに、無慈悲にも後方に控えていたウルトラマンの三叉の 槍が空から迫る！

「ぐっ!?」

ガツ!!と突き刺したのはアスファルトの地面。間一髪、身を振らせてシンフォギアの装甲を掠めて火花を散らすだけで済んだ翼：この勢いのまま跳びのいて距離をとる。

改めて確認する槍のウルトラマン：額や旨といった随所に青いクリスタルのような機関が輝き、まだ暗い今の時間は目を惹く美しさを感じるほどだが、三叉の槍も相まって薄闇に映える姿は翼にとっては悪魔か鬼と思えた。彼の名は『ULTRAMAN S U I T G I N G A』：冠する銀河の名に恥じず災禍の渦を拵げている。

XとGINGA、どちらも強い：片割れどちらかだけだったら善戦も叶ったかもしれない。2体のウルトラマン相手にととう追いつめられ、肩で息をする彼女に対し、G

I N G Aが頃合いと機械的な音声で語りかける。

『諦ルンダナ。大人シク投降シロ。』

降伏の呼び掛け：確かに、勝利は絶望的。されど、

「舐めてくれたものだ。防人たる我が身は剣、そう易易と手折られるものか！」

この程度の危機で止まる程度で、世界は救えはしない。密かに仕込んでいた短刀を投げ、Xの影へと鋭く突き刺さる。金縛りにされたように硬直してしまう。相手の動きを封じる翼の十八番『影縫』、流石のウルトラマンでも動けない：一方、残されたG I N G Aは『良カロウ！』と槍を振るい激しい突きを繰り出す！

「ふっ はっ！ ハッ！」

残像が残る程の勢い、なれど防人たる彼女が見きれない程でも、ましてや捌ききるなら余裕な程。ヒュ！ヒュ！と、ギリギリのところかわし続け、刹那の隙を狙う。



そして、下段の薙ぎ払い　そこッ！

「ヌンッ！」

タイミングをあわせて、跳ねると全体重をかけて槍を踏み込み地面へと縫い付ける。

「とつた！」

ニヤリと口角かわり吊り上がる…　しかし、

『惜シカッタナ。』

「!？」

GINGAは槍を放って離脱。その背後にはX…右腕のガンドレッドを2本の鉄棒が重なる砲台へと変化させて翼を標準に捉えていた…

「…(れ、レールガ…ッ!?)」

事態を認識するより早く、彼女は音速を越える電撃弾で撃ち抜かれていた。発射されたのは実弾だろう…本来、シンフォギアには届かないはずの質量兵器だが、規格外の威力と超高压の電流がピンボールのように意識と彼女自身を彼方までふつとばす。数秒後には停泊していた貨物船舶に埋まるほど叩きつけられ、アームドギアは明後日の方向に突き刺さる。

「不覚…ッ」

もう遅い。GINGAが目の前に降り立つと、強引に翼を掴み灰色の機械的な腕輪を右腕に装着させる。『なにを…』と呟いている間に彼女を灰色とウツドブラウンのウルトラマンらしきパワードスーツが包む。頭部の後ろに反ったスラツガーと赤いバイザーアイは並行世界にてリアアやクリスたちを襲ったメビウスキラート同様な外見をした『ダークロプス』。その役割は殻にして檻、翼の自由を完全に奪い去る鎧…装着者の意思とは無関係に動いて勝手に戦線を離脱。GINGAとXもそれを見送ると、視線をまた別の場所に移す…

丁度、シンフォギア装者ふたりが爆発に投げ出される形で転がってきた…

『月読 調』と『暁 切歌』、装者の中でコンビネーションは右に出る者はまず居ない…そして、並行世界へと出向しているマリアを除けば、唯一の『ウルトラマンスーツギア』を扱える。つまり、今回の敵には有効になりうるはず……だったのだが…

「どうして…ッ 同じウルトラマンの力が通じない!？」

「L. I. N. K. R. 切れた時並に、ギアが動かないデス…!」

調はACEスーツ、切歌はSEVENスーツのギアを発現させている。しかし、目の前の大剣を担ぐ黒と銀のウルトラマンにはその力は通じない。しかも、シンフォギア自体も不調で一方的に追い詰められていた。

敵は銀と黒のボディに『O』を模したカラータイマーが印象深い『ULTRAMAN SUIT ORB』。円い鏢が特徴的な大剣オーブカリバーを担ぎながら、ゆっくりと炎の中から調と切歌に迫る。

「調、このままやられるわけにはいかないデスよ!」

「うん、どんなに絶望的な状況だって諦めない!」

やられてばかりでなるものか！ 窮鼠、猫を咬むと言わんばかりにバリバリ！と悲鳴をあげるシンフォギアに鞭打ち出力をあげる。そして、アームドギアから放つはアイスラッガーと光輪を模したエネルギー…。しかし、ORBはオーブカリバーを地面に突き刺し腕を十字に交差…。歪な円の光が形成されるとゴオオ!!と紫帯びた白銀の光線を発射。戦乙女たちの決死の必殺技を苦もなく押し返し、あっさり粉碎。大爆発が起こり、煙が立ち昇る頃には調と切歌は糸が切れたように崩れ落ちていくところだった。

そんな彼女たちを無慈悲に掴みあげるXとORBは、翼と同様に腕輪を装着させ、ダークロプスのスーツの中へ押し込む。これで、3人の戦乙女が囚われた…



「——天ノ羽斬、シユルシャガナ、イガリマ、共に反応消失ッ！」

「装者たち3名のバイタル、フォニツクゲインどちらも確認できません！」

「なんだとツ!？」

「そ、そんな…」

S. O. N. G 作戦司令室のオペレーターたちは次々と最悪の情報で司令官である風鳴弦十郎に投げこみ続け、技術担当のエルフナインも右往左往する始末。現在の半分にあたる戦力が一気に失われたとなれば、どんな優秀な司令官とて迅速な判断は難しいだろう。

しかし、自らの迷いが一瞬でも重なり続けることで事態の悪化は深刻になることは弦十郎だって解っているからこそ頭をフル回転させている。もう既存戦力で対処しきるのは無理なのは明白。なら並行世界からマリアとクリスを連れ戻しつつ、別世界の装者に縋るより他ない…が、ギャラルホルンのゲートで並行世界を渡り歩くにはシンフォギ

アとその装者がいなくては無理。その残る響、未来、奏も外で戦闘にあたっており、肝心要の彼女たちがいないと話にならない。どうする…？

「(分散された時点で勝敗の盆はあちらに傾いていたわけか!)…小日向くんは戻せないか!？」

「駄目です! たった今、撃墜され…: つ!? 敵、こちらに高速で向かってきます! この勢い、まさか…!」

未来の戦闘不能と同時に敵の接近を告げるアラームが響き渡り、僅か数秒としないうちに司令室の天井を破壊して爆炎と悲鳴の喝采をあびながら『ウルトラマン』がボロキレのようになった神獣鏡のシンフォギアを纏う未来を引っさげながら着地する。黒と白のボディに金色の『V』と輝く冠を頂く細めながらもマツシブなウルトラマン『ULTRAMAN SUIT VICTORY』。弦十郎の前に立ちほだかるや司令室全体へ警告を発する。

『動クナ。動ケバ、コノ小娘ハ死ヌ。シンフォギアノ技術者ハダレダ?』

「私のことは、構わないで…ッ きやつ!？」

VICTORYは未来を人質に司令室を占拠。続いて無人機のダークロプスが2体侵入してオペレーターたちの頭上を浮遊して抵抗しないよう見下ろす…

戦力の大半を失い、司令塔を奪われた。皆が理解する…これは、完膚なきまで敗北である。



「何するもので、シンフォギア…と言っておこうか。」

本部の制圧をVICTORYが確保したことと、3名の装者の生け捕り…1名も元が

大して強くなかったものの事実上、無力化。残るはあと2人と並行世界を渡った何名か……並行世界側は『星殺し』と自らを謳うメビウスキラに任せただから大丈夫だろう。

(ふむ……。噂に聞いてはいたシンフォギア、ダークロプスの自立型軍団にD改装を施した『新世代(ニュージェネレーション)スーツ』まで宛行いはしたが、口程にも無い。)

——黒いウルトラマン……悪魔(ベリアル)は嘲笑う。

幾度となく世界を救い、創世の神や世界蛇すらも退け、並行世界を渡れる力を持つ……そして、特に改装も不要でスペシウムまで扱えるようになるというのだから、かなり警戒していた。まあ、重要なのは扱う人間ではなく、シンフォギア自体だが……

ベリアルは火の手があがるS・O・N・G。本部を一瞥すると再び戦場に目を戻す。

「しかして、ダークロプス20機相手に抗うじゃないか。」

視線の先……大量のダークロプスに囲われながら、尚も奮戦するのはアマルガムを展開して戦う響。既に数機は撃破され転がっているが、数の暴力の前に神にすら届いた拳はポロボロだった。未来を人質されたことに加え、本部の制圧は完全に冷静さを失わせるも



ので、今まで紙一重で捌いていたダークロプスたちの攻撃も幾度となく直撃を貰っていた。

「どけえ!!」

強引にでも本部へ乗り込もうとする響の行動は本来、セーフティに回るマリアや翼がいれば防げたかもしれない。ブレーキがぶつ壊れた暴走車如く、こちらに飛びかかる彼女は実に脇が甘い：フンツと、鼻を鳴らすと棍棒型の武器『ギガバトルナイザー』を構え繰り出される格闘技の連打を捌いていく。

「ハアアア!だつ!オオ!」

「忌々しいな、その身のこなし：『ヤツ』を思い出す……だが：」

「!」

右ストレートを弾いて、響の顔前で突きつけるギガバトルナイザーの先端：ガトリングのそれを彷彿させるソレは予測に違いなく砲身。ポツ!!と凄まじい火を噴けばいくらアマルガムの力があれどゼロ距離からの大ダメージは避けられずふつとばされ、少

女は宙を舞う。…が、空中で姿勢を立て直し、勢いを殺しながら着地。そう簡単に易易とやられはしな…

——ザシュツ!!

「…がつ!?!」

されど、背中への衝撃と同時に無慈悲に切り落とされるアマルガム。スラツガーを構えたダークロプス2機が彼女の背後で交錯し、天使の羽を、聖者の拳を引き裂いたのだ。

「——これで、エンドマークだ。」

王手。

ギガバトルナイザーを放り、ベリアルは鉤爪が印象深い右手を縦に十字で腕を構え、赤黒いエネルギーを収束させる。その時、響は何をするつもりか察し咄嗟に離れようとしたがダークロプスが飛びかかり羽交い締めにして動きを抑えられてしまう。次の瞬間、視界を覆う程の闇の光線に包まれ、一帯を巻き込む大爆発が起きた…。

「かは……」

限界…装甲も砕け、アマルガムの残骸も塵になり、激槍の少女は地に伏した。それを、  
ダークロプスたちが回収にまわり、先に囚われた者たちと同様に腕輪をつける。

「さて、計画はこれからだ。」

夜明けの光が闇の戦士の勝利を照らす… 序章のエンドマークは打たれた。

ここからが本当の幕開け。

シンフォギアとウルトラマン…その運命が再び交わる時、大いなる陰謀が戦士たちの  
物語を揺るがす。



## 新たなウルトラマン

時を同じく、並行世界。

マリア、クリス、セレナの3人もダークロプスゼロIIメビウスキラーからの襲撃を受け、拉致寸前のところまできていた。しかし、突如として現れた謎の少女がモンスタージャギア『グルジオ』を纏い乱入。危機を救われるマリアたちだったが…



メビウスキラールは敗走していた。

ダークロプスゼロ・スーツは片腕を失うほど破損した上に、メイン武装のスラッガーも紛失…ボディには爪に引き裂かれた跡、マスクはひび割れて散々な有様。元より未調整かつマリアとの戦いでダメージが蓄積していたとはいえ、『グルジオ』は想定以上の敵で隠し玉の『スペシウム』の無効化も通じない…ならばと、全力でコストリカのジャングルを飛行で突き抜け逃げることを選択したのだが。

当のグルジオは砲身を背負う肉食恐竜チックな巨体に似合わず、木々をなぎ倒しながらジェット噴射で凄まじいスピードで追ってくる。

「クソ！…こんなの話に聞いてねえぞ！」

悪態をつきながら、バイザーからビームを放つ…が、グルジオの堅牢な装甲は熱くなる程度。モンスターギア自体に大したダメージは無い。流石にこれ以上は分が悪いから…ろくにエネルギーも残っていないし、不肖だが潮時だろう。

「…あばよー！」

「！」

行動不能になっていた戦車を見つけ、片手でグルジオに放り投げるともう1度、バイザーからのビームを放ち破壊し爆発させて目くらましに。顔面に直撃を受けたグルジオはこれには怯み、その隙にとダークロプスゼロは捨て台詞を吐いて上空へ逃げ去っていく。

「逃がすか！」

対して、グルジオは逆噴射の急ブレーキから地面を刮りながら着地するなり、尻尾を地面に叩きつけボディを固定。背中の黒鉄に鈍く輝る砲台にエネルギーを収束させる。恐らくシンフォギアの切り札『絶唱』にすら匹敵する光の渦が檻を破ろうとする野獣のようにゴオオ！唸りをあげ、美剣は無防備なメビウスキラの背中へと標準をあわせた。

「落ちろ！」

次の瞬間、砲口から放たれる彗星が如き光の柱。山吹色を帯びつつも、無慈悲に全てを焼きはらう潮流は射線上にあるダークロプスゼ口をとらえる……ことは叶わず、獲物は寸前で金色のワームホールを展開するなり飛び込んで姿を消した。

取り逃がしたか……『ちっ』と舌打ちした美剣はグルジオを反転させ、装者たちが放り込まれたカプセルの元へ向かう。まずはとマリアのカプセルのケース部分を爪で引き裂いて破壊すると、ガラス片がパラパラと舞い、中身のマリアも手で庇うが気にしない。取り敢えず、時間的に余裕は無いのだから。

「立て。」

「あ、ありが……ちよ、なに!？」

一方、助けが来たと思つたマリアだったが立ち上がるなり、グルジオの爪先が胸元に突きつけられた。危うくカプセルの中に転がり戻りそうになつたが、構わず質問がとんでくる。

「その武装、スペシウムだな？ お前らはA・I・Bか？ 私が知る限り、歌いながら戦うなんてトンチキな輩がいる連中ではなかつたはずだが。」



「ま、待って…!! 助けてくれたんじゃないの!? それに、貴女は一体…。もしかして、科特隊の人?」

敵対の意思は無いととにかく伝えねば。すると、最後の言葉に一瞬だけグルジオな硬直したのを確認…数秒後、砲塔が持ち上がりグルジオの背部が肋を開くように展開、中から美剣が現れる。

「お前たちいつの時代の話をしている?」

「いつの時代って… その武装はスペシウムでしょ? なら…」

マリアの見立てでは、このグルジオ…恐らくはウルトラマンスーツと同系統にあたる物のはず。しかし、美剣は首を傾げて暫く…血みどろのマリアや未だカプセルで足掻くクリスやセレナに目を向け溜息。

「応急処置はしてやる。その間、話を聞かせてもらおうぞ。」



それから、クリスとセレナを引つ張りだし、グルジオに積んであつた応急処置キットで手当てに入る美剣。消毒液や脱脂綿に包帯、ピンセットなど見慣れた物の他、謎のオレンジのジェルが入ったボトルなどを駆使し手際よく処置を施していく…。爛れかける傷口や止まらない血の海をにも怯まず進めていく様は『素人』のソレではない…。明らかに訓練を受けている。

(もしかして、この娘は衛生兵かしら? …にしては、砲兵(?) ばりな兵器よねコレ。)

処置を受けながら、マリアは美剣の素性を考察しながらも自分たちが何者か…そして、別の並行世界で出逢つた科特隊の話を伝えた。基本、『そうか…』『続ける。』くらいしか返事は無かつたが、科特隊の話だけは気難しい顔をして思うところがある様子。

一時間後… 3人の処置は完了。本格的な治療はここでは無理だがこれで今はヨシとしよう。

「ありがとうございます、助かりました。えっと、美剣さんで良いかしら?」

「ああ。こちらにも興味深い話を聞かせてもらったからな。」

「……………あの気になっていたけれど、貴女は科特隊の人ではないの?」

さて、把握しておかなければならないことはシンフォギア装者側にもある。…グルジ才、引いては美剣は何者なのか? ダークロプスゼロといい、今回の話は間違いなくウルトラマンの世界が関わっているとみて間違いない。彼女もその関係者なら…

すると、彼女は『あくまで私の推論だが…』と疑問へ答える。

「私もお前たちと同じ、次元を跨いできた存在だ…だが、お前たちが出逢ったウルトラマンの世界は恐らく私が来た時間軸の世界とは別物だな。私の世界では科特隊は愚か、『星団評議会』も既に壊滅している。」

「なんですって!?!」

星団評議会…簡単に言えば、銀河レベルの国連みたいなもので、現・科特隊の母体組織。それが、壊滅しているとしたら、科特隊は存在してないはず… されど、ならこの

グルジオはなんだ？異星人の兵装にしてはウルトラマンに親しいものを感じるのは何故か。気になるところだが、今は重要なのはそこではない。

「恐らく、そのパラレルワールドでお前たちは目をつけられたんだろう。まあ、星団評議会が存在する世界なら文字通り容疑者など星の教程だが……」

鼻で星団評議会を嗤う美剣……。マリアたちの知るところではないが、星間同士で銀河レベルで手を取り合いなんて聞こえの良い建前こそ前面にあるが、実際は謀略やテロを煽ったりの他に暗殺など日常茶飯事と腐敗した組織である。彼女の世界でもそれは同じで、皮肉が洩れるのも無理はないだろう。無論、必ずそこに犯人がいると限られたわけではないのも留意すべき。

「並行世界を跨ぐ敵か。あの世界にそんな技術があるとは思えなかったけど。取り敢えず、本部に戻るべきかしら。貴女も一緒に来てくれる？」

取り敢えず、文字通りに敵の目星もつかないので基本世界に戻る判断を下すマリア……。それに、クリスやセレナも応じるが美剣は顔を険しくする。何かあるのか？

「マリア、恐らくだが…お前たちの拠点も危ないかもしれないぞ。」

「え…」

「恐らく、敵の狙いはお前たちのシンフォギアだろう。改修を必要とせずスペシウムの装備まで発現させる兵装など多くの者の興味を惹くのは間違いない。」

「そうだ、メビウスキラもそれを仄めかすことを言っていた。敵が何者にせよシンフォギアを把握しているなら、戦力が分断されている今のうちに基本世界に攻撃してきてもおかしくはない…」

…この時、既に手遅れと知るのもう少し後だ。

「クソ、なら急いで戻らねえと…痛っ!？」

「無茶はするな、あくまで応急処置に過ぎん。傷口が開くぞ?。」

「早るクリスをたしなめながら、グルジオへ飛び乗る美剣は片手で携帯端末を操作し何やらホログラムで何やら座標を確認するとスッポリと機械の竜を着込んで起動。眼に光が灯ると首をあげてマリアたちへ最後に言葉を残す。」

「お前たちはついてくるな。私に任せておけ。」

「美剣さ…っ!?!」

そして、彼女はジェットを噴射し上昇。そのまま青空の彼方へ鳥のように消えていった…。

取り残された少女たち。満身創痍だが、残念なことに言われたまま大人しくしている彼女たちではない。現場のリーダーであるマリアにクリスがわざとらしく問う。

「…で、これからどうするよ？ 任せておくか？」

「まさか。マムに連絡をとって、本部に戻りましょう。様子を確認してそれから、すぐにウルトラマンの世界へ行くわ。」

「姉さん、私は…」

「セレナは残って。万一、この世界にまた敵が来ないとも限らないし。」

今後の行動は決まった。後はF・I・Sからの迅速な回収と基本世界の無事を祈るばかりだ……

(万一と言っても、残っていた皆がそう簡単にやられるはずは無いと思うのだけれど  
……)



「ああああアア!!!」

——ダーククロプスーツを装着されて尚、響は抗っていた。

限界を振り切った力で強引にスーツのパーツを引き剥がしながらフラフラであつてもダークロプス軍団に立ち向かうが、ヒョイツと避けられて脚をかけられたりした上に無防備になった背中を踏みつけられたりと最早、戦いとして扱われていない。それでも、ダークロプスを振りはらい立ち上がると拳を構える。

(この程度のピンチがなんだ……！もつと絶望的な状況はあつた……！ 拳は握れる……歌もまだ唄える……ッ！まだ戦え……！)

「ふむ。」

——ドゴッ

「カハッ!?!」



まだ消えない闘志を嘲笑うギガバトルナイザーのリングが胸を殴打する。悪魔（ベリアル）の手が頭蓋を包み、握り潰さんと凄まじい握力をかけていく…

「言っただはずだ…これでエンドマークだと。」

「まだ…負けてない…！私… 私たちは…ッ」

——美しいものだ…希望の光が絶望の闇へと儂く散っていく様は。

「…やめろ!!」

ベリアルはマスクの舌で恍惚な笑みを浮かべながらギガバトルナイザーを振り上げる…！ これに気がついた奏が踵をかえし、響を救出すべく全速力で駆ける。だが、悲しいかな…ガングニールを持ってしてもあまりにも距離が開き過ぎていた。

（間に合え！間に合え間に合え間に合え間に合え!! 繰り返してなるものかア！）

脳裏に過ぎる『友の最期』。もう繰り返さないと誓ったのだ…もうあのような悲劇は

絶対に。この槍が折れないなら、自分がまだ唄えるなら……！

——ドゴオオツ!!

無情に鉄槌は振り下ろされ、巨大な土煙と土砂が舞った……

途端、カランと槍が地に落ち……奏は膝をついた。呆然としながらも脳は事実を処理し



ダーククロプスの兜が。

何事かと思うより先に、ヒュンヒュンと暗い空舞う風切り音と直後にパシツ!!とコンテナの山の上でスラッガーを掴む音。炎と昇りかけの朝日に染められながら青いマントを靡かせる『戦士』が息絶え絶えな響を膝を折りながら抱きかかえていた。後ろ姿のため全身のフォルムは見えづらいが頭部はダーククロプスを彷彿させる……だが、鋼ながらも優しく包む手に響は不思議と安心感を覚えていた。

「……あなた……は？」

「——俺は『ウルトラマン』だ。もう大丈夫、ここから先は俺に任せろ。」

熱く、優しい男の声。見つめてくるツインアイがその奥に血が脈打つ温もりを覚えさせてくれる…… 朦朧とした意識のまま、こくりと頷くと意識が遠くなってしまうが……不安は全くなかった。後は彼が何とかしてくれる、そんな確信と共に彼女は気絶した。

そして、『戦士』は少女を降ろして立ち上がり、下方の空振ったギガバトルナイザーをブンツと振り回したベリアルを見下ろす。ダーククロプスに似ているが、スーツは白銀にトリコロールカラーとヒーローらしい色合いにマントを靡かせる様は強者のオーラを醸し出す。

「…ククク。これも宿命、いいや運命というやつか！」

相対するベリアルは笑い…そして、『宿敵』の名を叫ぶ！

「次元を超えても尚、立ちほだかるとはな…ゼロオ…？」

——ウルトラマンゼロオオオオ！！！！」

## ULTRAMAN / ZERO

ウルトラマンゼロ：

…いや、正確には『ZERO SUIT』と呼ぶべきなのだろう。

彼はベリアルを見下ろしながら強く拳を握っていた……。『勇者へゼロ』と『悪魔へベリアル』の因縁など少女たちなど預かり知らぬことだが、両者のぶつかり合う威圧はただ見ているだけで息を呑む緊張感が並々ならぬ積み上げられた何かを物語る。

この悪魔と相対する奴は味方なのか？ 奏には目まぐるしく変わる自体に頭が追いつかずにいたが、ゼロは彼女に気がつくなり乱暴に叫んだ。

「おい、お前！あぶねえから下がってろ！」

あ、私か？ それ以外、この惨劇の舞台で誰がいるというのか… その時だった

「ゼロオ、私を前にして余所見とは良い度胸だな？」

ベリアルがギガバトルナイザーを突きだすや、ゼロの背後にダークロプスが踊り出てバイザーからビームを放つ。不意打ちのつもりだったろうが、ゼロは持っていたスラッガーをビームの射線ピツタリに投げつけて自らを貫かんとするエネルギーの一閃を裂き、そのまま飛んでいった刃はダークロプスの頭を文字通りに兜を割るほどめり込んだ。

この一連の動きは丁度、ベリアルに背中を晒すことになる。待つてましたと言わんばかりに、悪魔は身を滑らせるように距離を詰めてギガバトルナイザーを振りまわす…！

——ガキンツ!!

「!」

しかし、横腹目掛けた一撃は金属音がかえってきただけで肝心の敵には届かない。マントの影に隠れていた翠のクリスタル状の刃が輝く『ウルトラゼロランス』がギガバトルナイザーを受け止めていたのだった。ガングニールに比べれば、遥かに小さく可愛ら





——…あの悪魔を圧している

響の救助にあたりながらも、奏はゼロの猛烈な攻勢に目を奪われていた…。仮にも、アマルガムまで使った響を完膚なきまでに叩きのめしたあの悪魔をたった単騎で…それに匹敵する否、上回るかもしれない力。あの『ウルトラマン』と名乗る奴は何者…？

「…う」

「立花！　大丈夫か…？」

タイミング同じく、背中に背負った響が呻きをあげる…まだ息はあるし、手当てすればまだ命の危機には至らないだろう。今はここを離れなくては、巻き込まれる危険性は充分に高い。

「デリアアツ！」

「ぐぬっ!？」

そんな頭上にゼロが弾いたギガバトルナイザーが宙を舞う。武器を奪われたベリア

ルに問答無用のウルトラゼロランスが振り下ろされるが右手の鍵爪でガード：更に、空中で回転していたギガバトルナイザーを左手で遠隔で制御し砲撃、自身も爆風を浴びながらもゼロを無理矢理引き剥がす。

「ぐあつ!!」

「フンっ!!」

ゼロもこの拍子にウルトラゼロランスを取り落してしまふ。だが、まだワイドショットMarkIIや素手だけでも十分な武装にもなる。『ジュアツ!!』と拳を構えて尚も相対する勇者に対して、片膝をつきながらも首を軽く振る動作をするだけで悪魔らしく不敵に笑む。

「お前ツ、捜したぞ? 『俺達のスーツ』を返しやがれ!」

「並行世界を跨いで追ってくるとはご苦労なことだ! 貴様のスーツも頂くぞ!!」

「…ツ!」

再びベリアルに飛びかかるゼロ… だったが、ダーククロスたちが飛びつき次々と群

がつて達磨のように鋼鉄の塊が膨らんでいく。恐らく、20は匹敵するような数に雁字搦めにされ身動きがとれなくなってしまう。

「くそ……が……！放し、やがれ……！！」

「これで終わりだ！」

この瞬間を待つてましたと腕を交差させたベリアル。ガングニールのアマルガムすら粉碎したあの光線を放つつもりだ……直撃を受ければ、ウルトラマンスーツとて大破は免れない。

「舐めんなアアア!!デエエヤアアア!!」

だが、ゼロとて易易と喰らう程に素直ではなく、経験も積んで生き汚いほうである。もう片方にもワイドショットMarkIIを装備するとスペシウムをジェットのように放射・推進力としてダークロプスの塊ごと回転をかけていく。一瞬で竜巻が起きる程のスピンのなり、そうなればいくらダークロプスとて剥がれ落ちていきベリアルにも数機は飛んでいき怯ませるくらいは出来る。

これだけでは叶わない脱出…ゼロは更にマグマに燃えるように紅の姿へと変えていき…

「ガルネイトオ…バスターツツ!!!」

全力の焔のアッパーでダークロプスの繭をぶち破った。

熱き勇者の拳が邪悪を砕き、崩れ行く兵士たちに悪魔もこれには焦りを覚え後退り…

「…長居しても収穫は無しか。」

「!… 待て!」

金色のワームホールを背後に開くなり、撤退の準備をはじめめる。追おうとするゼロだが、ベリアルは嘲笑しながら彼方を指差す…

「良いかなア、ウルトラマンゼロ? 私に構っていて?」

「何? …!」

本部の潜水艦：飛びたっていくウルトラマンたちにダーククロプスの小隊。しかも、GINGAとX、ORB、VICTORYは未来やエルフナインを捉えているだけではなく、ダーククロプスの中には翼や調に切歌の生体反応もあるとゼロスーツのモニターは映す。最初から狙いはこつちか！

「ちっ！」

悔しいが、人名を疎かには出来ない。ワイドショットMark IIをジェットエンジン代わりに噴射：大気を抉るように飛び少女たちの救援に向かう。ワームホールに逃げられたら、手遅れだ。

実に数秒も要らない速度で、一気に迫る：だが、させまいとVICTORYの捨て身の体当たりがゼロの行く手を逸らす。こうなれば、制御が効かない加速のまま本部に突っ込み穴を空けた…。

『撤収ダ。』

襲撃者たちは戦利品をひっさげてワームホールへ去っていく…。エルフナインはも

がいていたが、未来はぐつたりと動く様子も無い。やがて、金色の時空の歪みの中へ彼等は見えなくなる…。ゼロもなんとか立ち上がるが、不時着の衝撃だけで凄まじいダメージになる…フラフラだ。それでも、ワイドショットMark IIに光を灯さんとすも『ボホ…ボ…』と不完全燃焼の音を立てて沈黙。加えて、力尽きたようにゼロスーツも紅の輝きを失い無機質な鋼色へと変貌した。

「クソ、いつもだったら…余裕なんだけどな…」

呟いたゼロは糸が切れたように倒れる…

ベリアルルの姿もまた何処にも無い…

朝焼けの闇と共に消えるワームホールがヒーローたちの敗北を物語る。



「…冗談…でしょ？」

「嘘だと言えよ、オツサン！ 先輩たちがそんな簡単にやられるわけが…」

並行世界から戻ったマリアとクリスを出迎えたのは耐え難い惨状の本部と停泊していた港の有様だった。焼き払われ、切り刻まれ、抉られ、目を覆いたくなるこれらの上に、翼と切歌と調の他にエルフナインまで敵に拉致されてしまったという事実。教える弦十郎としても自らの無力さと悔しさを胸に押し止めるのが限界だ。

「すまない、俺がついていながらこの不始末。敵についてはデータベースを片っ端からあたっているが、わかるのは敵は恐らく『ウルトラマン』関連ということだけだ。それ

「以外は何も……」

「……マリア！ ウルトランマンって奴等の世界に早く行こう！そこなら、何か手掛かりが……！」

「すぐに並行世界に向かうことを提案するクリスだが、それをまた『待った』をかけたのも弦十郎……」

「待つんだ、クリスくん。手掛かりが全く無いわけじゃない。今、何か事情を知るとおぼしき人物を保護している。どうやら『ブラスト』と『美剣サキ』と名乗っているが、心当たりはないかマリアくん？」

「美剣……彼女、ここに來ているの？」

「驚いた……まさか本当に並行世界の壁を単独で超えてくるなんて。」

『『ブラスト』なる人物はわからないが、取り敢えず弦十郎に美剣について自分たちがメビウスキラーに襲われた際に助けてくれた人間だと説明。手当てもしてくれ、諸事情は謎なもの、一応は敵でない」と伝える。『なら、こちらも感謝の意を伝えなくては



な』と弦十郎だったが残る問題は…

「ブラストって、誰だよ？」

「さあ…そつちは私にもわからないわ。」

「どうやら、美剣サキくんと面識はあるみたいだが。彼のおかげで響くんと奏くんは助かったんだ。こちらは『味方のウルトラマン』だと思いたい。医務室でふたりとも休んでいる。」

ブラスト…ゼロスーツを纏っていた男で戦いの末、力尽きていたところをスーツごと保護された。しかし、マリアの記憶にも『ブラスト』なる人物は居ない。ダークロプスの軍勢を退けるだけの力を持つ彼が仮に味方になってくれるならとても心強い…最も協力するかは彼次第なのは念頭に置かねば。

「今、彼も目を覚ましているようだ。マリアくん、戻って早々に申し訳ないが…」

「わかってるわ。私も同行して話をききましょう。」

「アタシもいくぜ。あの無茶好きのバカの様子も気になるしな。」



——やれやれ、とんだハマやらかしたな。

医務室：清潔な白いベッドからむっくりと起き上がった男。彼、『ブラスト』は自分の腕に刺さった点滴の針を抜くなり顔をしかめる。痛みもまあそうだが、自分が見ず知らずの並行世界でまた見ず知らずの組織の世話になっている事実が情けなかったのだ。

そのことはまあ良いとして……。痛みはあれど身体は動くし、真っ直ぐ立てる。お気に入りの眼鏡はベッド脇の棚の上、サラリーマンスーツの上とネクタイは丁寧にハンガーラックに吊るされていた。最後は右腕のプレスレット：銀色に輝いて傷ひとつ無い。

——仕事道具も含め、諸々は無事か。取り敢えず、こここの責任者に話をしないと…

「……諸星？」

——は？

その時、プシユンと部屋の電子ドアがスライドするとピンクブロンドの見たことない女と鉢合わせ。丁度、眼鏡をかけた自分の顔を見て大変、驚いている… …取り敢えずだ。

「…どちら様？」

## ALERT / 何かが叫ぶ声

(ブラスト…一体、どんな人なのかしら……え!?)

マリアは医療室に入るなり戸惑ずにはいられなかった。Yシャツ姿に伸びかけの黒髪に違和感があれば眼鏡をかけた顔はウルトラマンの世界で出逢った『ある男』と瓜二つ…

「…諸星?」

「えつと……どちら様?」

諸星弾…セブンスーツを操りスペシウムソードを用いた剣の達人で、時に冷酷無慈悲な性格はかつてマリアたちとイフロ星人を巡って対立を起こしてしまった程。彼ならダークロプスを退ける程の力がある可能性もあるだろうが、彼…ブラストの反応はどうにもおかしい。

「いや、あなた諸星弾でしょ。セブンスーツの……ほら、私よ!! マリア・カデンツヴァナ・イヴ!! イフロ星人の時に一緒に戦った……!」

「何その囁みそんな名前!? ……あのさ、人違いしてない? 君のような美人を忘れるわけないし、イフロ星人……だっけ? 全然知らないんだけど……?」

「……ええ? (もしかして、諸星じゃない?)」

「いや、『ええ』言いたいのコツチなんだけど。」

性格も陽気でかなり違う……というか、若干、チャライ。正直、『畜生以下のクソ異星人は抹殺』とかおっかないイメージが先行していた諸星の顔で『美人』とか言われても違和感通り越して、不気味で気持ち悪い。諸星本人には悪いが……

では、このプラストなる男は何者? ……他人の空似? ……はたまた、並行世界の別人?  
?

認識がすれ違う中、クリスがマリアに問う。

「マリア、コイツ知り合いなのか?」

「そうだと思ったんだけど……何か違うみたい。顔はそっくりなんだけどね……。失礼した

わ、あなたがブラストで良いのかしら？」

「あー、美剣のやつか。そっちは名前じゃねえんだ。俺のことは『レイト』って呼んでくれよお嬢さん方。（キラーン☆）」

…うっ!?

ドン引きするマリアとクリス。キザな笑みに寒気が駆け抜ける…。変人から変態、ホムンクルスから神まで相手をしてきた彼女たちだがこのブラスト改め『レイト』なる男の態度は乙女たちをタジタジにさせるには充分だった。

そんな彼を呆れたと言わんばかりに、その影から溜息を漏らす聞き覚えのある少女の  
声…

「それをやめろと言っていているだろう。あとふたりの処置も終わったぞ。」

「…美剣!」

美剣サキ。弦十郎から既に聞いてはいたが、意外に早い再会である。どうやら、隣のベッドで寝ている響や奏を手当てしていた様子で、ダークロプスやベリアルに手痛いダメージを負わされていたものの、安らかに寝息をたてている様子からひとまずは安心の

ようだ。持参していた謎の薬剤等をアタッシユケースにしまいながら、弦十郎に処置の完了を伝える。弦十郎も『協力感謝する』と答えた。

「美剣サキくん、君はマリアくんたちとは既に面識があるという話は本当だったようだな。」

「ああ。残念ながら私が来た時には手遅れだったが……。それに、そのバカが保護されていれば流石に無視は出来まい。」

バカ：ああ、レイトのことか。申し訳無さそうに苦笑している。マリアやクリスも響と奏の無事に安堵：『またこちらでも助けられたわね。』と礼を述べるも美剣は：

「まあ、気にするな。このバカのついでだ。」

無愛想についてと告げる。というか、レイトに対して扱いが割と酷くないかこの娘？

流石に本人も『2回も言ったよ、バカって：』と若干、落ち込みました。

さて、ここからが本題。



「では改めて、君たちに事情を聞きたい。あの襲ってきたウルトラマンたちは何者で、君達とどういう関係なのか？　そして、君達自身の目的は？」

「…」

途端に、レイトと美剣は鋭く顔を引き締める。美剣はともかく、先までマリアとクリスを口説こうとした彼さえ緩んだ笑みを完全に消し去り、戦士の顔をのぞかせた…やはり、彼がゼロを纏っていたというのも嘘ではないと、肌で感じさせる威圧。

無論、それで引き下がったりはしない。マリアも真実を知るため食らいつく。

「…美剣、レイト。あなたたちの行動は『偶然』で片付けられるものじゃない…。まるで、敵を追ってきたように見えた。私はちは拐われた仲間を救いたいし、追う敵が同じなら力になれるわ！」

今回の一件はパラレルM78ワールドが何かしら関わっているのは間違いない。なら、ウルトラマンの専門家である科特隊に協力を要請することだって出来る。向こうには進次郎、諸星、北斗といった心強い味方だっているし、それに加えて彼等が手を取りあってくればどんな相手だろうと簡単に負けはしないだろう。

「頼む、アタシの大事な人たちを失うのはもう嫌なんだ。頼みの綱はアンタらしか…」

クリスマスも頼む… しかし、

「……参ったな…。取り敢えず、改めて自己紹介するか。俺は『望月レイト』、AIB所属のウルトラマンでコードネームはプラスチック。AIBつてのは『Aliens Investigation Bureau』、異星人捜査局の略だな。」

急に改まって自己紹介をしはじめると。弦十郎が訝しげな表情で彼を見る…彼の真意は？

「異世界を取り締まる組織ということかね？ マリアくんから聞いた科学特捜隊と似ているようだが…」

「ま、そうだな。科特隊が前身となった組織の一つだし。因みに美剣は『O-50(オー・ファイフティ)』って組織の所属でコイツは…まあ、うん。ややこしいから置いておこう。さて…美剣からはアンタたちのことは大まかに聞いた。何にせよ、S.O.N.G.

のお前たちと同じく俺も組織の人間ってことだ。話せることと話せないことがある。」

「自分の組織の機密に関わることは教えられないということか？」

「そゆこと。手当てしてもらって悪いが。…その代わり、俺達で連れ去られた娘たちは必ず奪還する。これでどうだ？」

唸る弦十郎…ここで、何も情報を獲られないのは避けたいところ。何か一つでも拐われた装者たちの足がかりになればと思つたのも彼を助けた理由のひとつだが、彼や美剣の強さも破格かつ未知数なのも事実。彼等に任せるのも一手かもしれないが…

「アンタたちじゃ敵に太刀打ちは出来ない。ここは任せてくれ。」

「しかし…」

「…おい、あのバカたちはどうした？」

そんな時、異変に気がついたクリス。美剣が看護していたであろう響と奏が寝ているはずのカーテンに遮られたベッド…開けてみれば2人の姿は無い。

「ああ、あの二人ならもう出ていったが…。」

「は!?! アイツら動けるのかよ!?!」

「私が『AME—CHAN』まで使ったのだからな、当然だ。」

(あ、餡…ちゃん?)

大事だろそこ…。というより、餡? ウルトラマンにボコボコにされて重傷だった彼女

たちが、動けるようになるまで短時間で回復させる『飴ちゃん』とは一体…。並行世界の異星人由来の技術だろうか…？

無事にこしたことはないがふたりは何処へ？

そんな時、弦十郎が胸元の端末にピピッと通信を受け手に取る。『俺だ。何かあったのか？』と訪ねるやオペレーターからもたらされていく情報に顔を険しくしていく…。あえて口に出すまでもなく悪い知らせの類いなのは想像に難くない。

「悪い知らせが2つ…：ギャラルホルンが今までにないタイプのアラートを示した。恐らく、並行世界で何か異変が観測されたのだろう。そして、もうひとつ…：響くんと奏くんが許可を待たずに並行世界へ跳んだ。」

「なんですって!?!」

「馬鹿な、いくら飴を使っても精神疲労までは緩和が精一杯だ!」

仰天するマリアと美剣。無茶癖がある組み合わせだが、大切な存在である翼と未来の危機も相まってか先走ってしまったと見える。

すると、レイトもよつこらせと重い腰をあげて腕のブレスレットに振れる…すると、眩い翠の光に包まれたと同時にゼロスーツが装着されトリコロールのカラーの装甲が息吹くように輝く。

「どうやら、ゆつくり寝てはいられないようだな。…まずは、じゃじゃ馬なお嬢さん方を連れ戻さねえと。」

それから、ギヤラルホルンの保管庫まで移動した一行。確かに、ギヤラルホルンは歌のようでありながらおどろおどろしい暗雲を彷彿させる音色と赤黒い光でアラートを鳴らしており、初めてのレイトと美剣はおろか、マリアとクリスさえも息を呑むほどの畏怖があった。

「コイツはなんだ？ 何が起こって…」

「わからない。でも…『世界を揺らがせるナニカ』がこの先で胎動しているような気がする。とてつもなく、大きくて、恐ろしい何かが…」

「…恐ろしい何か。…（あと気の所為かもしれないけど、このアラートの音色に先輩の歌が微かに聞こえるような…）」

戸惑うクリスとマリアを尻目にゼロはマントを靡かせ、グルジオを起動させた美剣と共に一歩、前へと進む。

「準備は良いな？ 向こうの世界がどうなってるかわからない分、絶対に俺達から離れるなよ。」

「…つて、おい!? なに、勝手に仕切ってたんだ!?!」

「細かいことは気にするんなって。2人を連れ戻すことが今は最優先だ…いくぞー!」

そして、シンフォギア装者とウルトラマンたちは並行世界へと旅立っていく…。まだ彼女・彼等は知らない、その先に待つ並行宇宙（マルチ・バース）すら揺るがす存在が待ち受けていることに…

これらの行動が…

「…全てがシナリオ通りに進んでいる。ククツ、ベリアル様ア……」

影から嘲笑う、誰かの筆先のまま歩かされていることもまた知る由もない。

N E X T .  
s i d e  
U L T R A M A N



## NIGHT MARE / 不協和音

……暗闇の中

淀んで、全てを呑み込むような深海のような広さでありながら、出口の無い密室のよう息苦しい。自分は立っているのか、浮いているかすらも定かではない……でも、ずっと視線の先にうっすらと白銀に輝く人影が見える。赤いラインが入ったスラツとする後ろ姿は見覚えがあった……

「——ウルトラマン?」

この単語が指すのは地球に来訪した光の巨人かもしくはそれを模したパワードスーツのこと。目の前の彼は恐らく前者……しかし、こちらに気が付き振り向きはじめると異変に気がつく。

猫背で頭から背中にかけての鯨のようなトサカと背ビレ、異様に長い腕から爬虫類のような爪が伸びている……。



「小僧、小僧……！ しっかりしろ！」  
「っ！」

怒鳴りながら心配する声に目を覚ました進次郎。覚醒するなり襲いかかる筋肉痛やら倦怠感に呻きながらもガチャガチャとスーツの音を立てながら半身を起こす。目の前にはフェイスを開いた片膝をつくセブンスーツから諸星が顔を見せていた……。声はいつものキレル時の調子だったが、やはりこちらを心配しているようである。例えおっかなくても、先輩なのだ。

…そういえば、俺は元々何をしていたんだっけ？

「諸星さん……？ 俺は……」

「記憶が混濁しているのか？ スーツの負担が大き過ぎたのかもしれないな。…立てるか？」

助け起こされながら思い出す… そうだ、自分は試作ウルトラマンスーツのテストを行っていたのだ。名前は『グランセイバード・スーツ』：開発者のイデさんとヤプール曰く、ULTRAMAN、ver. 7、ACEのウルトラマンスーツの性能を文字通りに合体させたスーツなんだとかどうとか。セブンを彷彿させるデザインである紅いスーツでありながら、肩などの甲冑らしいデザインは無くなって青いクリスタル質な滑らかなものとなりシルエツトはウルトラマンに近くなった。更に、腕にはACEのぶつた斬ってやるギロチン刑装備までついてるだけではなく、腰にはブースターも兼ねる試製スペシウムバスターソードまで：他、色々あげるとキリがない。

実用的なものからロマンまでガン積みのため、スペックが従来のスーツよりかなり高い…高いのだが

「…そうか、俺は模擬戦中に気絶したのか。」

「ベースがver. 0だ、再構成したとはいえやはり、実機テストは早すぎたんだ。」

実はこのスーツ、純粋に3つのスーツを統合させたわけではない。何もかもが別ベクトルの全てを併せるべく素体として採用・再設計されたスーツがある。それは『ver. 0』：ULTRAMAN、SEVENのプロトタイプにあたるのだが、あまりにもピー

キー過ぎる性能は装着者の負担を全くをもつて省みないものであり、年長者である諸星すら実践運用は問題だと示した程。

しかし、グランセイバード・スーツ建造計画において白羽の矢が立ったのはやはり、再評価された高いポテンシャルに開発当時から技術力の向上と天才異星人技術者・ヤプールの参加に加え、何よりも…過負荷に耐えうる人材…要はウルトラマン因子を持つ進次郎のことが大きかった。

そして、早々と計画は科特隊上層部や政府の認証を通り、ものの数日で建造許可が降りた。それから、湯水のように投入された玉石混交の資材に人材…溺れてしまうような勢いにかえて、現場は混乱はあったものの作業は急ピッチで進められ、足りないのは唯一の時間のみだったという。

…で、今日という日。問題が山積みそのまま実践テストが強行するも当初の予定を超える過負荷に進次郎が耐えきれず、検証相手のセブンの一撃を思いつき脳天に受けて…現在に至る。それでも、痛む頭を押さえながらも立ち上がった。

「すみません、諸星さん。俺は大丈夫ですから、テストを再開しましょう…うっ!」

「バカ言え。その青白い顔をして続けるのは無理だ。それに、データは充分に損ねたしな…。イデさんにも報告はしてある、今日は下がれ。」

「…はい。」

結局、諸星に圧されるまま演出ホールを後にする進次郎。装着を解除し、スーツを格納カプセルに転送すると前身黒タイツのようなアンダーの服となる。イデが負担軽減に少しでも役立てればと用意してくれたものだが、結果を出せなかったことに申し訳なく思いながらエレベーターに乗り込む。

(…イデさんには謝っておかないとな。あ、今なら午後の授業にも少し出られるかも。)

今更だが…思い返せば、つい数ヶ月前まではごく普通(※一応)の高校生 だった自分の生活は大きく変わった。ベムラーの襲撃、はじめてのウルトラマンとしての戦いを端に、幾度となく異星人と戦い、時には生死の瀬戸際まで追いつめられたこともある。

我ながら、随分と様変わりしたもんだ。そう思いながら更衣室につづく廊下に出…:

「シンジロー!!」

「……うわあ!?!……つと。」

腹に突然の衝撃。転ばなかったものの、おたおたとバランスを崩しかけ冷や汗……やれやれ、この娘の元気さを目にしたら考え事なんて何処かに行ってしまう。

「危ないよ、『キリエ』。廊下は走らない、いきなり人には抱きつかない、約束だったろ?」「エへへッ、ゴメンナサイ。デモ、地球ノ言葉ハウマクナツタヨ!」

『キリエ』……進次郎に抱きついた癖のついた髪はまだ年端の幼い少女のあくまで地球においての暫定的な名前。……そう、異世界の戦乙女と共に助けたあの『イフロ星人』である。

本来なら、母星へ帰してあげるか各国いずれかの異星人街へ放りこむべきなのだが、残念ながら宇宙レベルの諸事情から異星人街の治安悪化等により、依る術も生きる全てもない彼女を突き飛ばして再び悪意ある異星人に利用されたら目に手もあてられないと特例で母星へ帰る算段がつくまでにと科特隊にその身をおくことになったのだ。

「凄いな。でも、あんまり無理しなくて良いからね?」

「…ウン！アリガトー…！」

因みにイフロ星人は歌で会話する種族で地球人のように普通に言語を話すのは難しい。最も、彼等の会話が地球人には歌のように聞こえるだけとイデの談。まあそれで中々、意思疎通がとれず、最初は危うく抹殺対象となるとここで戦乙女たちが割って入り最終的に事なきを獲た。

今は地球人の言葉も幾分か喋れるようになり、科特隊の面々からは妹や娘、マスコツトのようなポジションにちやつかりおさまっている。

「シンジローも、無理シタラ駄目だよ？」

「…！… ありがとう。」

そうか、自分を心配してキリエは来てくれたのか。確かに模擬戦中に気絶したとなれば、安否が気になるのは当たり前だろう…かつてはすれ違いで殺し合いになりかけたとはいえ、随分と懐かれたな…

そんな時、慌てた様子でやってくるイデの姿を見た。



「進次郎くん！ 身体は大丈夫かい!?」

「平気ですよ。ご心配をおかけしました。」

「…そうかあ！ 念の為、精密検査を手配しておいた。万一、君に何かあつたらハヤタに  
あわせる顔が無いからね。」

「わかりました。」

酷く慌てた様子のイデ… いくら歳の割に元気とはいえ、無理はしてほしくはない。  
ヤプールもいるとはいえ、科特隊の貴重な技術者であり進次郎とも幼い頃から知り合い  
なのだから。

取り敢えず、促されるままキリエと一旦別れて精密検査へ。血液、血圧、心拍数… X  
線から問診まで一通りやって、それから学校の制服に着替えるとイデとキリエにまた合  
流してまたエレベーターに乗り込む。これで、今日の科特隊の仕事は終わりだ。する  
と、改まって口を開くイデ…

「改めて、今日はすまなかつた進次郎くん。言い訳になって見つともないが、このグラン  
セイバード・スーツの計画そのものはお偉いさんの適当な思いつきが発端でね… 私もヤ  
プールもあまり乗り気じゃなかつたんだが、こんなことになってしまった。計画中止の

打診をエドを通して何度もしたんだが……聞き届けてもらえなかったんだ。」

「イデさんもヤプールも悪くないですよ。きつと、誰が悪いとかそういうことじゃなくて、皆が不安でしようがないんだと思うんです。異星人の暴動やテロも頻発してますし……それに……」

数週間前の記憶を辿る進次郎……

ここから海を渡った先……摩天楼の街・上海市で文字通りの世界の終焉が始まったのだ。

イーヴイルティガとカミーラ率いる闇の勢力により、深淵の儀式が行われ、こちらの世界に権現した邪神ガタノゾア。奴は己の排出する暗黒で世界を呑み込もうとし、空を覆い尽くした眷属である翼竜ゾイガーの群れが逃げ回る人々を喰らい貪る地獄絵図が繰り広げられ、それにウルトラマンたちは対処にあたる。

この戦いは進次郎の決死の特攻により、邪神の完全な権現は阻止できた……ものの、数万人規模の死者・行方不明者の上に上海市消滅という最悪の爪跡を残す形で幕を引いた。

「——今は、どんなに小さくても継る光が必要なんです。どんな闇にも呑まれないために。」

「…進次郎くん。」

これがキツカケだったんだろう。深淵の闇と蹂躪の恐怖は人々の心を確実に蝕んだ。死は遠いものじゃない、ある時に何処からともなくやってきて、理不尽に迫る。そこから、怖れが生まれてありもしない影が更に恐怖を駆り立てていく。

グランセイバード・スーツが創られた理由はそんな恐怖が発端なのか…それとも、闇に抗う意思が火種になったのかは進次郎にはわからない。

ただ今は、絶望を祓う希望が…ウルトラマンが必要なんだと。

「…なーんてね。そんなこ難しい顔しないでくださいよ、イデさん。闇の戦士やら邪神やらはもう御勘弁ですけど、必ずしも並行世界から来るのは悪い奴だけとは限りません。現に、それで助けられた命だってありますから。」

一転、重くなった空気をぶち壊すべく明るいトーンで話す進次郎。彼の言うとおり、

並行世界から来て手を取りあえた者だっていたのは事実：先の事件を共に解決すべく共闘した異界のウルトラマン『TIGA』ことマドカ・ダイゴとユザレ：それに：

「…シンフォギア装者の娘たちのことかい？　最初は歌って戦うなんてトンチキな娘や兵器を一生、忘れられないと思つてたのに：今じゃ随分と昔に思えるなあ。まだ一年経つてないんだけど…」

目を細めるイデ：進次郎も『本当に色々あり過ぎましたからね。』と苦笑しながらキリエの頭を撫でる。キリエも撫でられたことが嬉しいのか、はたまた恩人であるシンフォギア装者たちの話題が出たからか向日葵のような暖かい笑みだ。

「あー！　あのシンフォギア、今度機会があつたら心行くまで調べ尽くしたいものだよ！」

「痴漢で訴えられないように注意してくださいよ？」

「そうだな？　ワハハハハハハ！」

他愛もない会話。普通の高校生だったら頃はなんとも思わなかつたけど、今はそんな

何気ない刹那にさえ安らぎを感じる…

そんなこんなしている内にエレベーターは目的の地上1階のウルトラマン記念館へ。旧・科特隊基地施設に丸々ウルトラマンや科特隊関連の物や宇宙関連の展示物を並べたこの施設はデートスポットや街合わせ場所、子供たちの遊び場やオタクの溜まり場などなど色々な役割を果たして賑わって… 心無しか、いつもより人が多いような？

「なんだか、騒がしいですね…？」

「そうだな。今日は平日だし、特別な催し物は無かったはずだが…」

不思議に思いながらも、人集りが出来ている場所を背伸びして覗き込む。すると…

「…はいはい、押さないでー。」

「……順番デスよー。」

(え？ この声は…!?)

聞き覚えがある！ 進次郎はすぐに人集りに突撃して平謝りしながら突き進む…掻

い潜ったその先、中心にいた少女ふたりはまさに噂をすれば何とやら。

「…調ちゃんに切歌ちゃん!？」

シンフォギア装者の月と太陽の名コンビ、調と切歌だった。

……どういいうわけか、ウルトラマンスーツギアを纏っていたが。

## 歪んだ歌と来たぞわれらの…

再会は突然に。

キリエを救出し、元の世界に帰って以降は全く姿を現さなかったシンフォギア装者たち。勿論、進次郎にとっては喜ぶことである…のだが、どうして彼女たちは人目につく科特隊の施設内でシンフォギアを纏っているのか？悪事を働く異星人や他異常の気配な無いし、辺りは科特隊の催し物のコスプレとでも勘違いした人々でゴった返し平和なもの。カメラで写真を撮る人や握手を求める人…様々だが、一応彼女たちのシンフォギアは科特隊に置き換えればウルトラマンスーツ並に大事かつ秘匿すべきもののはず…。

「お？ お久しぶりデース！」

「ご無沙汰しています。」

「あ、うん…久しぶり… あれ、マリアさんは…？」

驚きながらも訝しげな視線を送る進次郎に対し、確かに記憶通りな身振りや喋り方を  
するふたり。相変わらず仲が良さそうで何よりだがマリアの姿は見当たらない…する  
と、ふたりは打ってかわって焦った表情をして進次郎の手を掴む。

「あ。あの！実は、私たちの本拠地が敵の攻撃に晒されてピンチなんでデス!! マリア  
も今はどうなっているか…」

「今、頼れるのは貴方たちウルトラマンだけなんです！だから、私達と一緒に来てくれま  
せんか!」

「え? ええ!? ちょっと…!」

シンフオギア装者の危機!?

…でも、さつきノリノリで被写体やってたよね君達?というか、正体を大声で叫ばな  
いで!? そんな疑問や何やらが飛び出す前にグイグイと顔を近づけて言葉を喉から胸  
へと押し返してしまう。年頃の真面目な男子である進次郎、ウルトラマンだろうと女子  
への耐性が低い…

「無茶も承知デス!でも、時間が…!」



「ち、近づ…!?!」

切歌の勢いに吞まれかける進次郎…ここで、見かねたのはイデ。

「落ち着くんだふたりとも。まずは事情を聞かせてくれないか？ 中へ案内しよう。エドにも話を通さない」と…

何はともあれ、人命救助や異星人への緊急対処以外にウルトラマンスーツを勝手に使用するの基本的にはNG…無理を通すなら司令官であるエドなら判断を仰ぐくらいはしなくては。ただシンフォギア装者の危機ともなれば、進次郎やイデとて穏やかではない。すぐにでも、助けにいきたいところだ。

そんな彼等を調は微かに口角を吊り上げながら見つめ…

「……（キエテ・カレカレータ）」

静かに呟く…『地球には由来しない言語』を。

進次郎とイデには聞き取り辛いだろう大ききで、誰も意に留めないことぐらいだ……聞き取れてもなんでもなくて済まされるのだから油断していたのだろう。まさか、夢にも思わないだろう……この場に『聴覚に優れ、言葉を理解しうる存在』がいることに。

「シンジロー……！ イデ……！」

キリエの叫びが進次郎たちを止める。そして、彼女は叫ぶ！

「ソイツら、シラベとキリカジャナイ！」

——『セレブロ』だ！」

——セレブロ？

彼等が首を傾げるより先に調がチツと舌打ちするなり、瞬時にイデの後ろに回りこむ

と彼を拘束。同時に気をとられた進次郎へ切歌が大鎌を振りかぶる…！反応が遅れた進次郎は防御すら間に合わず、死神の刃が肉を斬り裂…

「ムンツ！」

「ガキンツ!!」

「デアエツ!?!」

否、寸前でイガリマは割り込んできたスペシウムソードで止められる。諸星のセブんだ。

「諸星さん！」

「ボケつとするな！ はあッ！」

イガリマを切り払いで強引に間合いをとらせると進次郎に臨戦状態を促す。明確な敵対行動をとった切歌と調は諸星の眼に完全に『敵』として映る…。例え、一度は共に剣を握った仲であって、女子どもだろうと容赦はしない。

一方、進次郎はというと何の脈絡もない攻撃にかなり動揺していた。

「…ふたりとも、なんでっ!？」

「知りたければ…」

「ついてくるデスッ!」

そんな彼を嘲笑うようにイデを連れ去り、記念館の壁を破壊して逃走する彼女たち。すぐさま、『待てッ!』とセブンがその後を追う。進次郎も続こうとするも騒ぎになったため人目がさらに集中してウルトラマンスーツを纏うことが出来ない。

その時、彼のブレスレットに通信が入る…科特隊の司令官であるゼットン星人・エドからだ。

【進次郎くん、屋上に向かうんだ。】

「エドさん…!」

【そこなら今、人目につくことはない。移動しながら状況の報告を頼む。】

エドの指示どおり、エレベーターに逆戻りしながら切歌と調の凶行…そして、イデが

扱われたことを焦りを滲ませながら伝える進次郎。彼自身、理解不能の混乱で頭がいっぱいだがそれでも何とか言葉を繋げる。

「…突然で、一体なにがどうなっているんだが…！ そうだ、キリエちゃんが、ふたりを『セレブロ』とか言っていましたか…」

【セレブロ…？ 確かにそう言ったのかね？】

「え？ ええ…。」

セレブロ…その単語にエドが少し沈黙した。小さく『よりもよってか…』と呟いたのが聞こえた気がしたが、続けてふたりを追いかける諸星の通信が割って入る。

【小僧！ 確かにセレブロと言ったんだな？】

「は、はい！ キリエちゃんは確かにそう言っていました。」

【…成程な。イフロ星人の聴覚だからこそ気がついたのか。なら、早く来い。このふたりを相手に峰打ちで済ますには難しすぎる。追いつかなければ、仲良く刀の錆になるぞ。】

諸星も何か知っている？ 気になるところだが、彼の最後の言葉がなまじ冗談には思えない……急がなくては。最上階に着くなり、屋上に続く階段へ走り、駆け上がり、ドアを開けて床を思いつきり踏んで夕暮れ時にに差し掛かった茜色の空へと自分を投げ出す。ウルトラマン因子を持つこの身体はネコ科の猛獣や原人なんぞ遙かに上回る跳躍をもたらし、夕陽の彼方へと逃げ去る少女たちを視界に捉えることを可能にする。

そして、彼は拳を突き出し『光』を纏う。

「ジユアツ!!」

ギユオオオオオ!!とスペシウムの潮流が流れながら進次郎の身体を機械パーツと装甲が組み立てられるように包んでいく……。そして、舞い上がった身体は背部のスラスターを吹かし茜色の雲を切り裂く流星となる……

一方……

「このッ！しつこいデスね！お前に用は無いんデスよ！」

「ご生憎様、こっちは誘拐犯には用があるんでね。」

切歌に阻まれながらも、イデを連れ去り逃走する調を強引に追跡していたセブン。彼女単体なら簡単に確保出来ただろうが、数で不利なこちらでは大怪我を避けるのは難しい。別に好んで傷つけたりする趣味はない。今は、好機を待っていた。

「さて、そろそろか…」

その時、彼方の上空から隕石のように落下した何か調の行く手を阻む。慌て急ブレーキをかけた彼女の前に、ゆらりと『彼』は立ち上がる……

「……ジュア……」

「ウルトラマン……」

進次郎のスーツ：『ULTRAMAN SUIT B. TYPE』。

白銀と紅の装甲が夕焼をバックに美しく輝きを帯びる。

…来たぞ、我らのウルトラマン。

★ ★ ★ ★ ★

「——『寄生生命体・セレブロ』。異星人としては小型にして非力だが、知能は高く自らより強力な生命体などを宿主として意識を乗っ取るタイプの生態をしている。君の弟に寄生していたのもコイツだ。」

「…」

科特隊の手術室でエドは諸星と話をしていた。その隣には手術台に乗り横たわる諸星に似た男の亡骸に、大きなガラス瓶に詰められたエイと甲殻類をかけあわせたような



生命体が並べられている。

場所が場所なだけのゼットン星人であるエドの不気味さがかやり際立つが、諸星は気にしない。それよりも聞かねばならないことがある。

「レイは…弟は生きていたんですか？」

「いや、脳は既に内臓組織としては機能していない様子だった。殆どの肉体機能は同化していたセレブロによって維持されていたんだろう。彼の魂は既にこの肉体は無かったと言って良い。」

…そうか。

胸を撫で下ろした諸星は亡骸に視線をおとす。損傷が激しかったが、エドやイデの計らいで完璧とまでいかなかったも縫合で綺麗になっていた。そこに、尊厳の凌辱の痕など無い。

「わざわざ、ありがとうございます。弟もきつと喜んでいるでしょう。」

「…せめても、我々が君に出来ることだ。君は立派な兄だ。弟の尊厳を守ったのだから。」

エドの慰めの言葉が虚しく響く…

励ましは胸に届くことなく、諸星は眼をクイツと眼鏡をあげて隠した…。

「さて、これで終わりだクソ異星人…いいや、『虫ケラ』ども。」

…ついに追い詰められた切歌と調。

後方からはセブン、前からはウルトラマン…逃げ場はない。

「イデさんを返してもらおうぞ！」

相手のアクションの隙を与えまいと先にウルトラマンが踏み込んだ。以前の未熟な進次郎だったら、呼び掛けをしている間に相手へ人質というカードを与えていただろう。しかし、幾多の戦いを経た彼は迷うことなく、イデを担ぐ調に勢いを乗せたキックを見舞い弾きとばすとイデを奪還する。幸い、抱きとめられた姿を見る限り目立った外傷は無く、気絶しているだけの様子。不幸中の幸いか…

一方、くの字で屋上の手すりで叩きつけられた調だったが、痛がる素振りすらなくコキツコキツと蟲のように首を動かしながらゆらりと立ち上がる。

「捕獲対象、確認。…四肢等の欠損もやむを得なしと判断。」

そう告げると、手首を交差させエース同様の三日月状の刃を形成する彼女。そのまま、腕を振り抜きウルトラマン目掛け放つ。

対するウルトラマンはイデを抱きか抱えて跳躍、回避すると続けてくる第2波に空いた片手からスペシウム光輪・ウルトララッシュを放って相殺する。

一方のセブンも切歌を問答無用の剣の連撃で圧倒していた。間合いに踏みこまれると鎌の切歌では相性が悪く、流れるように連なるスペシウムソードの斬撃を防ぐだけで手一杯である。呼吸も乱れて体幹も揺らいで足許も怪しくなってきた：バランスを崩せば最後、刀の錆となるだろう。

「い、このお!? 少しは反撃はさせ…」

「貴様の意見など求めていない。」

次の瞬間、イガリマの鎌が宙を舞い：スペシウムソードの切っ先が喉元に突きつけられる。いくらシンフォギアといえど、武装であるアームドギアが無ければ特に脅威にはならない。

「はあああー！」

「くっ！」

ウルトラマンもイデを置いて、調と激しい空中戦を繰り広げていた。シウルシヤガナは本来ならふよふよと浮遊に近いくらいのことしか出来ないが、エーススーツ・ギアの機能で高い機動性や加速を獲得していた。しかし、そのエーススーツを手掛けたヤプールの技術でバージョンアップしたウルトラマンスーツに対応しきれず、ヤケクソ気味にまた三日月の刃を形成して突撃。対し、腕からスペシウムの光刃、ウルトラブレードを展開したウルトラマンが迎え撃ち両者は交錯…！

直後、シウルシヤガナの左腕装甲が碎け破損。調はバランスを大きく崩して墜落…そこを、ウルトラマンが組みつきビル屋上に叩きつけ、そのまま羽交い締めにした。

これで、完全にふたりは制圧されたのだった。

「諸星さん…！」

「よくやった。あとは…」

まだ終わりではない。セブンはスペシウムソードの刃先を切歌の眼前にチラつかせ

る：研ぎ澄まされた刀身は生唾を呑む少女の顔を映す。脅し：彼女たちではなく、『彼女たちの中に潜む何者』かへ向けて。

「武装を解除し、一刻も早くその娘たちの身体から出ていけ虫ケラども。選択肢は大人しく従うか、引きずりだされて斬り刻まれるかだ。さあ、選べ。」

「…」

観念したのか膝をつき、口をぐばあと開く切歌：その喉奥からモゾモゾと蠢く黒い影。忌々しげにセブンを睨む複眼が不気味に光り、グロテスクな音をたてながら這い出ようとしてくる生物：。諸星の狙いは最初からコイツだ。科特隊基地とセブンスーツのセンサーによる分析でふたりの体内から明らかに本人たちの発するフォニックゲインに隠れるように鼓動する振動波は確認しており、行動の怪しさからすぐに接触せずに遠目から監視していたのだ。

進次郎とイデにより想定外の戦闘まで発展したがまあ良い。これで少女たちの救出も出来る上に、異星人犯罪者もも確保。事態は終息に向かうはずだった…

— Croitzalronzell Gungnir zizzl…♪

「!」

その時、直感的に危険を察知したセブンはその場を飛び退き、死角から飛来し、自分を貫こうとした撃槍を回避。空を裂いた切っ先はスペシウムソードが棒切れのように見えるほど大きく鋭い…まともに当たれば串刺しになっていたかもしれない。

「諸星さ…!!」

「調ちゃんを離せえええ!!!」

「ツ!?!」

続けて、気を取られたウルトラマンの顔面に鉄拳が直撃。

ハンマーのフルスイングをもろに受けたような衝撃がスーツ越しでも伝わるほど重

く、かなりの重さがあるはずのウルトラマン・スーツが石ころのように簡単に転がされてしまう。

「…な、何なんだ？」

脳震盪を起こしかけの頭を抱えながらウルトラマンたちは前を見る。

乱入者はふたり… こちらに向けるのは『槍』と『拳』…

「よお、クソウルトラマンども。うちのかわいい後輩たちを随分と可愛がってくれたじゃねえか？ええ？」

「…これ以上、仲間に手出しはさせない！」

立ちはだかる撃槍二振り。ガングニールを纏う奏と響…

すれ違いによる最悪のエンカウントが幕を開けようとしていた…。



▶  
▶  
▶  
▶  
T  
o  
  
b  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d.

## シンフォオギア対ウルトラマン

「…なんとつ。我々の知らないシンフォオギアか…！」

科特隊司令室で映し出される奏と響に驚嘆の声をあげたエド。一つ目を子どものようにキラキラさせながらぐりぐりと動かす様はハッキリ言つて怖いが、今は誰も気にしてられない。現場は新たなシンフォオギア装者との戦闘へ突入…事態は悪化の一途を辿つていた。冷酷だが、判断を下さねば…エドはウルトラマンたちに通信を繋ぐ。

「進次郎くん、諸星くん…状況はこちらでも確認した。彼女たちへはこちらへの危害を加える意思がある以上、相応の対応で当たれ。…最悪の場合、抹殺対象と同等の扱いで処分しても構わない。」

「…そんなっ!？」

声をあげる進次郎…状況が状況とはいえ、罪もない地球人の少女を罪を犯した異星人と同じ扱いは流石に抵抗が産まれる。今の所、罪状としては誘拐未遂とウルトラマン

スーツの顔面をぶん殴ったことくらい……そこそこ大きいのが、抹殺という対応はあんまりだ。

しかし、甘いことは言ってられない。

「我々に割ける戦力はもう無に等しい。他のウルトラマンたちが出払っている今、彼女たちの無力化の手段は限られる。」

【でも……！】

【——了解した。】

喰い下がる進次郎だが、非情な諸星の返事が響く。

【諸星さん!?!】

【覚悟を決めろ、小僧。それとも、穏便な解決を出来る手段があるというのなら……】

……是非とも教えてもらいたいものだがね。」

セブンは奏と切歌に挟まれながら、ビル群屋上を並走していた……。スペシウムソード一本に対し、左は撃槍に右は死神の鎌といくらこつちはウルトラマンスーツがあつても数の不利。加えてイガリマのセブンスーツ・ギアは普通にこちらへ攻撃がまともに通る……思わず舌打ちだつてしたくなる分の悪さだ。

一方の奏から見れば、再会した大切な後輩に刃を向けていたクソウルトラマンにしか見えないわけで完全に頭が沸騰していた。セブンスーツがダークロプスに似ていたことも災いしたかもしれない……今は仲間に手を出した敵をブチのめして他の仲間の居所を吐かせることしか眼中に無い。

最悪の素性を知らない者同士のはとうとう刃を交える開戦のゴングが鳴り響く。

「おりゃああー！」

先に仕掛けたのは切歌。前からセブンの首を刈りとうとう回り込むが姿勢を低くしたセブンは簡単にすり抜けられ空振り。更にそこへ回り込んだ奏がガングニールを突きだすも、予想していたセブンは予め仕込んでいた手裏剣を投げつけて怯ませ、そのままキックをお見舞いしてビルの下へと蹴落とす。

一度出来た僅かなチャンス。すぐに切歌の制圧に向かおうと振り向いたその時、既に足許に斬り上げしようとする鎌の刃が迫っていた…！

「デエエス!!」

「ぐっ?!」

一撃。致命傷ではないが、胸からマスクのバイザーにかけて抉られるセブンスーツ。スペシウムソードで受けようとはしたが、衝撃を流しきれず刃こぼれとヒビ割れが起きて使い物にならなくなってしまう。

「舐めるなよー！」

ポイツとなまくらになった剣を投げ捨てると、両手にアイ・スラツガーを構えるセブ

ン。奏もすぐに復帰し切歌と並び立ち、容赦なく刃を向ける彼女たちへ再び立ち向かっていく…

「…くっ!」

「ふっ!はっ!やあっ!」

一方の進次郎のウルトラマン：Bタイプ背部のブースターで空中へ一気に距離を離そうと上昇を続ける。しかし、響はガングニールの脚部のジャッキを伸縮することによる衝撃を推力でマツハに到達するだろうウルトラマンへ喰らいついて思うように間合いが開かない…怒りと焦燥を滲ませた歌声が尚も光の戦士に迫いする。

「…なんで俺達を襲うんだッ!」

放つウルトラスラッシュ…! しかし、光輪は軽く激槍の拳が弾かれて、攻撃を掻い潜った響は一気にウルトラマンを肉薄した!牙を剥く少女の顔が進次郎の瞳に映り…

「襲ってきたのはそっちだろうがッ!!」

その瞬間、マシンガンが如き拳の連打が牙を剥く！ガガガガガガ…!!と強い衝撃にスーツの中の人間さえ穿つような痛みと激震…ウルトラマン因子を宿す進次郎でさえ悲鳴をあげ、バランスを崩した彼は情けなく墜落してビルの屋上をバウンドする。

「…うつ。なんて、パワーだ……」

なんとか態勢を立て直しながら悪態をつく…これくらいでダウンするようじゃウルトラマンなんてやっていけない。…が、追撃にまた響が拳を唸らせ飛んでくるのは流石に肝を冷やす。

意を決し、こちらもスーツの出力に進次郎自身の身体能力を上乘せした鉄拳を繰り出す…!

「うおおお!!」

「翼さん…はッ！ 未来は、何処だアア!!」

「ーゴオオオオオオオオ!!!」

直後、ぶつかり合うガングニールとウルトラマン。

おおよそ人サイズの出せるはずの無い大気が震えるほどの衝撃波が起こり、お互いの腕もビリビリとノックバックに襲われる。数秒後、間合いをとり睨み合う……だが、進次郎は引つかりを覚える。改めてだが、彼女たちが自分たちを襲う理由が皆目、検討もつかない……されど、彼女はこちら側に何か否があると思っっている様子。それに、切歌と調も明らかに様子がおかしく、キリエが『セレブロ』なる単語を言っていたが関係があるのか……？

とにかく、消耗続きのこのままで殴り合いを続けるのは得策じゃない……今更ながら会話を試みる。

「はあ…… はあ……！ 君たちはマリアさんの仲間じゃないのか!! 俺達は科特隊だ!」  
「……っ!?!」

止まった……!

どうやら話が通じないわけじゃないらしい。今なら何とか平和的な方向へ持ってい



けるかもしれない…

「惑わされないで下さい!」

「なっ!?!」

非情。微かな望みも乱入してきた調に断ち切られる。両手にスペシウムが迸る車輪を輝かせ乱舞するように襲いかかり、慌てウルトラマンは腕のスペシウムブレードを起動し防御。流れるような攻撃を紙一重で凌ぎながらも尚、彼女にも呼びかける。

「調ちゃんも一体、どうしたんだ!?! 俺達は戦いたくない…い…なんで…!?!」

「——（それは、お前たちがウルトラマンだからだ。）」

しかし、調は地球に存在しない言語で攻撃を続ける…まるで、彼が喋るのを力強くで止めるように…

「……調ちゃん……?」

何かおかしい…違和感を覚える響。科特隊のウルトラマンとマリアたちが共闘した経験があるという話は既に報告を受けているが、あまり戦いに乗り気でなさそうなウルトラマンに対してあまりに容赦のない調。戦い方もかなり荒々しい…

それに、彼等はこちらが襲ってきたと言っていた…

「…（何か、嫌なかんじがする。このまま拳を振ったら後悔するような…）」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「ぬう………」

科特隊の司令室にエドの唸る声…。

あわよくば、勢いでシンフォギアが手に入るかもしれない打算は僅かにあったが状況

は最早、それどころではない。下手をすれば、進次郎と諸星どちらも失う危険性が高い上にスーツのダメージも深刻な域に達しつつある…。一般の戦闘員は既にイデの回収に向かわせたし、また援護にまわったとしてもかえって足を引っ張るだろう。

他のウルトラマンは出払ってる…ハヤタと北斗は別件で、光太郎は単独行動。後はもう正直、避けたいがあと頼れそうなウルトラマンはジャックしかない。彼が関われば、シンフォギアに対してアメリカ政府からの余計な詮索をされる大義名分になりかねないが彼等の命には代えられない。

「致し方ない、ジャックに連絡を…」

「待ってください！ 周辺に別の振動波の反応…フォニックゲインです！」  
「なに!？」

その時、オペレーターが叫ぶ。レーダーが新しい存在を捉えたのだ…。『このパターンは…』とキーボードや計器を操作すると過去のデータと摺り合わせ唯一、一致するものを見つけた。それがモニターに映し出されるやエドは思わず呟いた。

「蜘蛛の糸、藁にすぎるとはこのことか…」